



## 特集・東京大学

東京大学本郷キャンパスツアー

### 現

役東大生の案内で、最新の教育研究施設を廻ると共に、歴史を繙くキャンパスツアーが人気を呼んでいる。

時代の先頭に立つ大学として、世界の知の頂点を目指して歩んでいる東京大学の創立は明治10年(1877)に遡る。当時は法、文、理学部と医学部で構成されていたが、その後合併によって総合大学となり、明治19年(1886)には「帝国大学」と呼称された。明治30年(1897)、京都にも帝国大学ができたので、「東京帝国大学」と改められ、第二次世界大戦の敗戦によって「帝国」の名が抜き取られて「東京大学」となった。

本郷キャンパスは、大部分が加賀藩の江戸屋敷跡だったが、付属病院の敷地は富山藩、弥生地区(現農学部と野球場)と浅野地区(現理工系施設)は水戸藩であった。

史跡の代表格である「赤門」(重要文化財)の正式名は旧加賀藩屋敷御守殿門、文政

10年(1827)年の建立。学内ツアーはここからスタートする。総合研究博物館、東洋文化研究所に沿って進み、キャンパスの南の端に位置する「懷徳館」の正面に出る。産学提携プラザ、本部棟を経て、「広報センター」で資料を眺め、休憩する。学内外の人たちが利用できる施設で、入試に関する資料も入手できる。建物は大正15年に竣工、東京都選定歴史的建造物。

医学部付属病院の前を過ぎ、理学部・化学館(大正5年竣工)を眺め、御殿下グラウンド地下記念館に入る。ここにはプール、テニスコートのほか、トレーニング室が設置され、モダンなスポーツセンターになっている。

外に出ると、目前には庭園「三四郎池」が控えている。正しくは旧加賀藩屋敷の育徳園心字池、夏目漱石の小説「三四郎」ゆかりの名で親しまれるようになった。

緩やかな丘にのぼる。聳え立つのは、東大のシンボルになっている大講堂(安田講堂、登録有形文化財)。安田善次郎氏の寄付で、大正14年に竣工、高さ約40m、以前は入

学式、卒業式に使われていたが、現在は学術講演会などに利用されている。

東大のシンボルとして、かつて学園紛争の標的となり、過激派学生が占拠して内部は破壊されたが、復旧された。

ここからツアーは法文学部一号館、二号館に沿い、銀杏並木の大通りを往く。銀杏は明治39年に植栽されたもので、樹齢約120年。この大通りと直交するアーケードを潜ると、ツアーの終点となっている総合図書館は近い。

噴水を背にしたこの図書館は、ロックフェラー財団の寄付によるもので、蔵書数は120万冊という。陳列品の中に、ポーランド政府から寄贈された石膏像「シヨパンの手」があった。

このツアーでは、理学、工学、農学施設の巡行を、時間の関係で除いているが、あらかじめ希望すれば、特別にリクエストすることもできるようだ。

## 東京大学は知の頂点を目指す！

教養課程が中核をなす総合大学

東京大学はいま10学部、15の大学院、11の附置研究所、3つの図書館、21の全学センターを擁するわが国で最大規模の総合大学である。施設の中核は本郷キャンパスに置かれているが、これに教養学部の駒場キャンパスと、教育や研究の新たな展開を目指す柏キャンパスを加え、2004年「国立大学法人」としての道を歩み始めた。

この大学の特色は、前期課程でリベラル・アーツの教育を行い、基礎力を構築してゆくことにある。学生は、文科(一、二、三類、理科(一、二、三類に分かれて入学し、教養学部で最初の二年間を送る。基礎学力を身につけるとともに、幅広い視点を得て問題意識を高揚させ、後期課程に進学して学ぶ学科を自ら特定させる。

ただし大筋として、法学部には文科二類、経済学部には文科二類、文学部、教育学部は文科三類から進学する。理学部、工

学部には理科二類、薬学部、農学部に進む場合には理科二類、医学部への進学は理科三類からとなっているが、実際には理三が最高の難関となっている。

この制度は、通称「進振り(進学振り分け)」と呼ばれていて、東大の教育システムの中核をなしている。科類からの進学枠は、原則として決められていたが、近年になって柔軟になり、理科から文科への進学も可能になった。だが実際には希望者が多いとき、前期の成績がものを言う。

教養課程で基礎を学ぶカリキュラムは、第二次大戦後、新制大学の発足のとき始まったもので、現在でも変わっていない。しかし専門課程に早く入りたいという学生の動向、教員の意見などによって変質し、内容が圧縮されているのが現状である。

戦前の制度では、帝国大学に入学するのは、高等学校(旧制、三年)を卒業することが資格となっていて、ここでは文甲(英文)、文乙(独文)、文丙(仏文)、理甲(理工進学)、理乙(医進学)に分かれて学んだ。一方早稲田、慶応その他の私立大学では予

科を設けていた。

戦後の改革で導入された教養過程と、旧制高校のシステムを合わせた制度、これが前期過程で基礎を学び、後期過程で進路を決める「進振り」に展開されたものともみることができる。「進振り」は北海道大学でも採用されていたが、廃止されて、東大だけでこのシステムが維持されてきた。

最高位の学術レベル

教職員は、教授1430名、助教授1260名を含めて、7500名あまり、しかも学術研究レベルはきわめて高く、学生を教育し、研究の指導をする環境の良さは突出している。世界の先端に行く研究内容が、実際に学生の授業に直接反映される態勢は、国内の他の大学を圧倒する。

ここに学ぶ学生、研究生、聴講生は約15000名、今年入学試験を突破して入学し、教養学部で学ぶ新入生は約3000名にのぼり、数の上でも巨大な大学である。

東京大学の地誌を紐解く

東京大学の設立は明治10年、およそ130年前に遡る。

その頃はじめて正確な地図が作られた。本郷区向ヶ丘の南、元富士町に接して設立された「帝国大学」は、本郷台地の東



の縁辺を占めていた。はじめに建てられた建物は、後に医学部本部、基礎系医学、薬学科となった辺りのようだ。地図上には三四郎池が見えるが、大部分のスペースに大きな建物はみられない。

一方台地の東側の不忍池から北に延びた池之端七軒町、宮永町には街が広がり、

現在の東大の前を走る大通りに沿った家並みも見られるが、これらを除けば、目立つた人家は無い。現在のキャンパス(地図では「向ヶ丘」)には、千駄木町からつづく緩やかな等高線が記されている。

本郷台地の周辺には、いまから7000年前の縄文海進で残された「貝塚」がいくつも発見されていて、広大な武蔵野台地の縁辺に位置した地誌を遙かに想起させる。このキャンパスに新しい建造物が造られる折、多くの埋蔵物が出土したこともむべなきことであり、歴史的な弥生土器の発見もその一つである。

唯一の「帝国大学」

日本で初めての国立大学としてつくり、創立後国益をかけ、近代化の先頭に立つ人材を生み出すことを使命としてきた。したがって特別な建学の精神というものには存在しなかった。国外から優れた教授が招聘され、つづいて優秀な学生が抜擢されて国外に留学した。多大な財政的な援助に支えられ、西欧の学問を学ぶことによつ

て、近代的な学者が育ったのである。わが国の第一世代の学問はまさに帝国大学で始まった。

帝国大学にはわが国の国益が掛かっていたので、本拠の本郷キャンパスに止まらず、国内の各地に拠点を設け、選れた研究施設や実習施設が設置された。宇宙線、地震の研究施設として神岡、乗鞍、八ヶ岳などがあり、広大な演習林、牧場などの施設は、北海道から九州にまで及ぶ。いままも千葉県検見川のスポーツ施設、静岡県戸田海岸、南伊豆の下加茂、山梨県山中湖、群馬県谷川岳、長野県乗鞍岳に保険体育施設をもち、最高峰の大学の地位を揺るぎないものになっているが、これらはわが国の近代化の歴史がもたらしたものである。

#### 東京大学の出身者一覧

東大は、学問を志す人が選ぶ唯一の道であつたため、出身者はわが国の政治、経済、文学、理学、工学、医学の第一線で活躍する。政治の世界では、内閣総理大臣となり、



理工系、医系を含むあらゆる分野で指導的な役割を果たしてきたのである。

いままも人口に膾炙している名前を挙げてみよう。45代総理大臣の吉田茂は戦後の講和条約の締結、46代の片山哲(日本社会党委員長)、52代鳩山一郎、56代岸信介、67代福田起夫、71代中曽根康弘、78代宮澤喜一氏。一方では作家、芥川竜之介、川端康成、大江健三郎、坪内逍遙、夏目漱石、正岡子規、森鷗外、志賀直哉、山本有三、谷崎潤一郎、堀辰雄、三好達治、太宰治、立原道造、三島由紀夫をはじめ、まさに枚挙の暇なしの群像を輩出した。

#### ミリタリ

ズムの時代には、軍人を志して陸海空軍に入つて将軍となるか、あるいは東大を旗頭とする帝国大



学を目指して各界の指導者となるか、という極端な時代でもあつた。戦前・戦後、文科系の学生は徴兵され、「学徒出陣」により戦場に送られた。戦争末期に法學部長となつた南原繁は、非戦のクリスチャンとして深く心を痛め、ひそかに重臣たちに終戦の工作をした。

南原の詠んだ歌に、人間の常識を超え学識を超えておこれり日本世界と戦う(1941年12月8日、真珠湾攻撃の日)

君死にしときに思はず声出て嘆きたるかな(教え子の戦死、戦病死が相次ぐ)

南原は1945年の敗戦後ほどなく、東大のキャンパスに戦地から戻つた(「復員」と言われた)学生を目の辺りにした。戦後初代の東大総長となつた南原は、戦場に学生を送つた教師の責任を痛感し、悔恨がにじんだ。翌年3月東大戦没学生慰霊祭で、彼は肅然と壮途にのぼつた学徒に、日頃それを教えたわれ

免除制度の恩恵を受ける学生が目立った。授業料の値

上げに、学生はストで応じ、卒業しても就職先を見つけていることは容易ではなかつた。

長い間閉ざされていた女子の入学出願が許され、男女共学が導入された。

けるような雰囲気が生じた。

1986年、総長森垣のことは、東大卒の肩書きが、実力を超えて物を言う時代は、仮にあつたとしても、もう過去の話と。

高度成長の時代となり、戦後の平等主義が行き渡つて、東大の名前を出すことが、むしろ否定されるときがきた。

東大はブランドを捨てて「普通」を求めるときであろうか……。それは否とすべ

われが正しかったか、否かを自らに問い、われわれの行く手にあるのは、いま、理性を薔薇の花として、厳しい現実との融和を図る平和の戦いである」という演説をした。

#### 東大は広く門戸を開いた

戦後東大は、復員してきた軍人や、専門学校卒業生にも門戸を開いた。

陸軍士官学校、海軍兵学校に在学中の或るものは、まだ存続していた旧制の高等学校を経て東大に入学した。物資の欠乏していた時代で食料は配給だった。生活を支援する生活共同組合の活動、奨学金制度により生活し、勉学する学生、授業料

#### 大学紛争で揺れた……

東大の権威を揺るがす事件が起こつた。大学紛争である。1960年、東大の学生、樺美智子さんが、安保のデモで警備隊との衝突で犠牲になった。1969年、安田講堂を占拠した過激派の学生を機動隊が排除。

大学の象徴として標的になつた東大は、激しい学生運動に揺れ、入学試験を中止せざるを得ない事態になつたが、次第に落ち着きを取り戻した。各界に活躍するエリートイメージは東大生をブランド視し、学生も、卒業生も、むしろ目立つことを避

ず、第二次大戦後は強くアメリカの影響を受けてきた。

しかし東大はいま、知の先頭に立つ気構えをしつかりと持つ。新しい力強い歩みを踏み出すであろう。